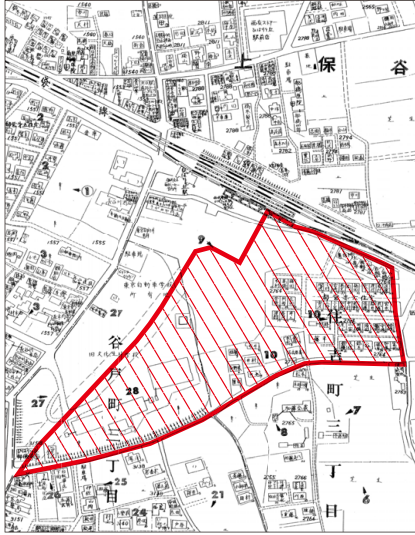


# ひばりヶ丘駅と南口地区の成り立ち

○西武池袋線ひばりヶ丘駅は、池袋駅から急行で2駅目、所要時間は最短で約15分の典型的な通勤通学駅です。平均乗降人員は約6万5千人/日と、日々、多くの人々が利用しています。

○ひばりヶ丘駅南口地区は、高度経済成長期に都市計画道路を整備したことを機に、比較的大きな敷地単位での建築や開発によって、まちが形成されてきました。

【昭和43（1968）年当時の南口地区】



当時、ひばりヶ丘駅には南口がなく、南口駅前もパルコ前の都道112号線と、鉄道敷地内に設けられたバス折返し場としての小広場があるだけでした。現在の駅前通り、りそな銀行、ひばりが丘プラザ、西友、パークシティひばりが丘の一角は学校跡地でした。



【駅前広場整備前の南口】  
（駅から現在のパルコ方面を望む）

大正13（1924）年、ひばりヶ丘駅は、旧西武鉄道田無町駅として開業しました。駅名からも想像がつくように、駅の所在地は保谷村でしたが、南口すぐに田無町との境が、さらには、東に久留米村、北に片山村（現在の新座市）と、4町村から利用できるロケーションに誕生した駅でした。

大正10（1921）年に現在の豊島区西池袋に開校した自由学園は、農場・運動場を中心とした「理想郷」的な住宅地を目指し、南澤学園町を造成します。現在の東久留米市学園町です。昭和9（1934）年には、自由学園本体も移転し現在に至っています。

第二次世界大戦が終わり、日本が戦災復興から高度経済成長期へと向かった昭和30年代、北多摩地域は、首都東京の発展に伴う人口増加によって急速に住宅市街地化が進みます。いわゆる「スプロール現象」と呼ばれるものです。保谷村は町制を施行しますが、全国でも人口の多い町の上位に名を連ねるなど、人口増加はあまりに急激でした。

この頃から、田無町駅は都心への通勤通学駅としての性格を強めていきます。南口駅前での都営亦六住宅、都営下保谷第4、5住宅（パルコ裏の都営住宅）の建設、さらには公団ひばりが丘団地の建設など、公的住宅の建設が相次ぎました。田無駅や中央線沿線各駅に向かうバスが頻りに発着するなど、現在の交通結節機能が形成され、田無町駅南口の利用者は年々増加していきました。

昭和34（1959）年、田無町駅はひばりヶ丘駅に名称が変わりました。

ひばりヶ丘南口は駅前として非常に手狭になってきたことから、昭和42（1967）年8月、都市計画道路事業が認可されました。昭和46（1971）年3月、南口駅前広場と（併）インテージのある交差点までの駅前通り、りそな銀行南側の市道などが、地権者の多大なご協力を得て短期間で完成しました。また、ひばりヶ丘駅は橋上駅に建て替えられ、新たに北口が設けられました。

当時、周辺駅を見ても、これだけの大きさの駅前広場と駅前通りが整備されていたのは、ひばりヶ丘南口ぐらいでした。こうした都市基盤整備によって、南口地区は都市近郊の駅前として発展します。

戦後復興・高度経済成長期  
（昭和20～40年代）

大正・昭和戦前期  
（大正～昭和20年）

現代（昭和50年代～）

現在のパークシティひばりが丘の敷地に、当時、大ブームだったボウリング場（ひばりボウル）が建設されました。また、駅前通りに沿って、埼玉銀行（現りそな銀行）、ひばりが丘プラザが相次いで建設されました。昭和53（1978）年には、駅前広場に面して大規模商業ビルが建設され、テナントとして北口から西友が移転しました。

平成5年、都営下保谷第4、5住宅の建替にあわせて駅前広場西側で市街地再開発事業が行われ、パルコをテナントとする住宅と商業とが複合したビルが完成しました。

平成8年、ボウリング場跡地に低層に商業・業務施設の入った大規模マンション「パークシティひばりが丘」が建設されました。



【整備中の駅前広場と駅前通り】



【昭和50（1975）年頃の南口地区】



【現在の駅南口と駅前広場】

平成17（2005）年、ひばりヶ丘駅の建替によって、南口のバリアフリー化が完了しました。